

中学校

平成 12 年 度

教育研究員研究報告書

音 楽

東京都教育委員会

平成12年度

教育研究員名簿（音楽）

区市町村名	学 校 名	氏 名
港 区	港区立御成門中学校	木根 渕 優 子
江 東 区	江東区立南砂中学校	<input type="checkbox"/> 柴 田 圭 子
世 田 谷 区	世田谷区立東深沢中学校	○ 久 野 真 紀
荒 川 区	荒川区立原中学校	○ 中 根 み き
練 馬 区	練馬区立八坂中学校	蒲 地 英 子
葛 飾 区	葛飾区立常盤中学校	山 本 明 子
三 鷹 市	三鷹市立第二中学校	◎ 給 田 茂
町 田 市	町田市立南中学校	<input type="checkbox"/> 児 山 友 美
西 東 京 市	西東京市立田無第三中学校	富 永 貴 美 子

◎世話人 ○副世話人 □記録

担当 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 原 田 徹

目 次

I	主題設定の理由	2
II	研究の構想図	3
III	研究の内容	
1	理論研究	4
	(1) 心に響く音楽活動	
	(2) 互いを認め合う音楽活動	
	(3) 豊かな創造性をはぐくむ指導の工夫	
2	調査研究	6
3	授業研究	
	【指導事例Ⅰ】 題材名「カノンの旋律を創作しよう」	10
	【指導事例Ⅱ】 題材名「フーガの楽しさを感じ取ろう」	14
	【指導事例Ⅲ】 題材名「自分たちの合唱“ソーラン節”をつくって表現しよう」	17
	【指導事例Ⅳ】 題材名「私たちがつくりあげるゴスペル」	21
IV	研究のまとめと今後の課題	24

研究のあらまし

研究主題を「心に響く音楽活動を通して、お互いを認め合い、豊かな創造性をはぐくむ指導の工夫」と設定し、研究を進めてきた。音楽活動を通して、どのようにしたら生徒がお互いに認め合い、豊かな響きや達成感を感じ、創造性をはぐくんでいけるかということを中心に研究協議を行った。

仮説を検証するための検証授業において、歌唱では、生徒がお互いに認め合いながら、音楽を表現する喜びを感じ取り、器楽では、自信をもって課題に取り組み、音楽を共につくりあげる楽しさや達成感を味わっていた。

心に響く音楽活動とは具体的に何なのか、豊かな創造性や、お互いに認め合うとは音楽科にとって、どのような意味合いをもつのか、授業研究を重ねるたびに主題について深く研究協議することができた。

I 主題設定の理由

音楽は人の心を豊かにし、人間的成長に大きくかかわっている。情操教育が重要視されている今こそ、音楽科教育が担う役割は大きく、音楽科の学習活動を通して一人一人の感情を揺り動かす、個性を豊かに働かせ、創造性をもった生徒を育成していくことが求められている。

そこで、本年度の教育研究員の現状とそれぞれが抱える悩みをいくつかあげてみた。

- ① 学年によって、週に1時間という少ない授業時数の中で、いかにして継続的に表現や鑑賞の能力を高めていくか。
- ② 合唱コンクールの時のような心を動かすことのできる授業展開を、日常の授業においてもどのように行うか。
- ③ 生徒に、いかにして意欲的に授業に取り組ませるか。
- ④ 伸び伸びとした表現活動ができるような雰囲気を、どうつくっていくか。
- ⑤ 新学習指導要領で示された、和楽器の扱いをどうするか。

特に、感動体験は、音楽を愛好する心情を高めるとともに、主体的に音楽とかわり、美しい音色を工夫して追究する推進力ともなるものである。また、集団の雰囲気が良好な場合は、感動体験を共有でき、さらに教育効果を上げることができる。

本研究員は、音楽科の授業において、互いを認め合う場面を数多くつくることや、一人一人の音楽的な技能を高め、達成感を味わわせることが感動体験にもなり、またそれが豊かな創造性の育成につながると考え、本年度の研究主題を「心に響く音楽活動を通して、お互いを認め合い、豊かな創造性をはぐくむ指導の工夫」と設定し、研究を進めることにした。

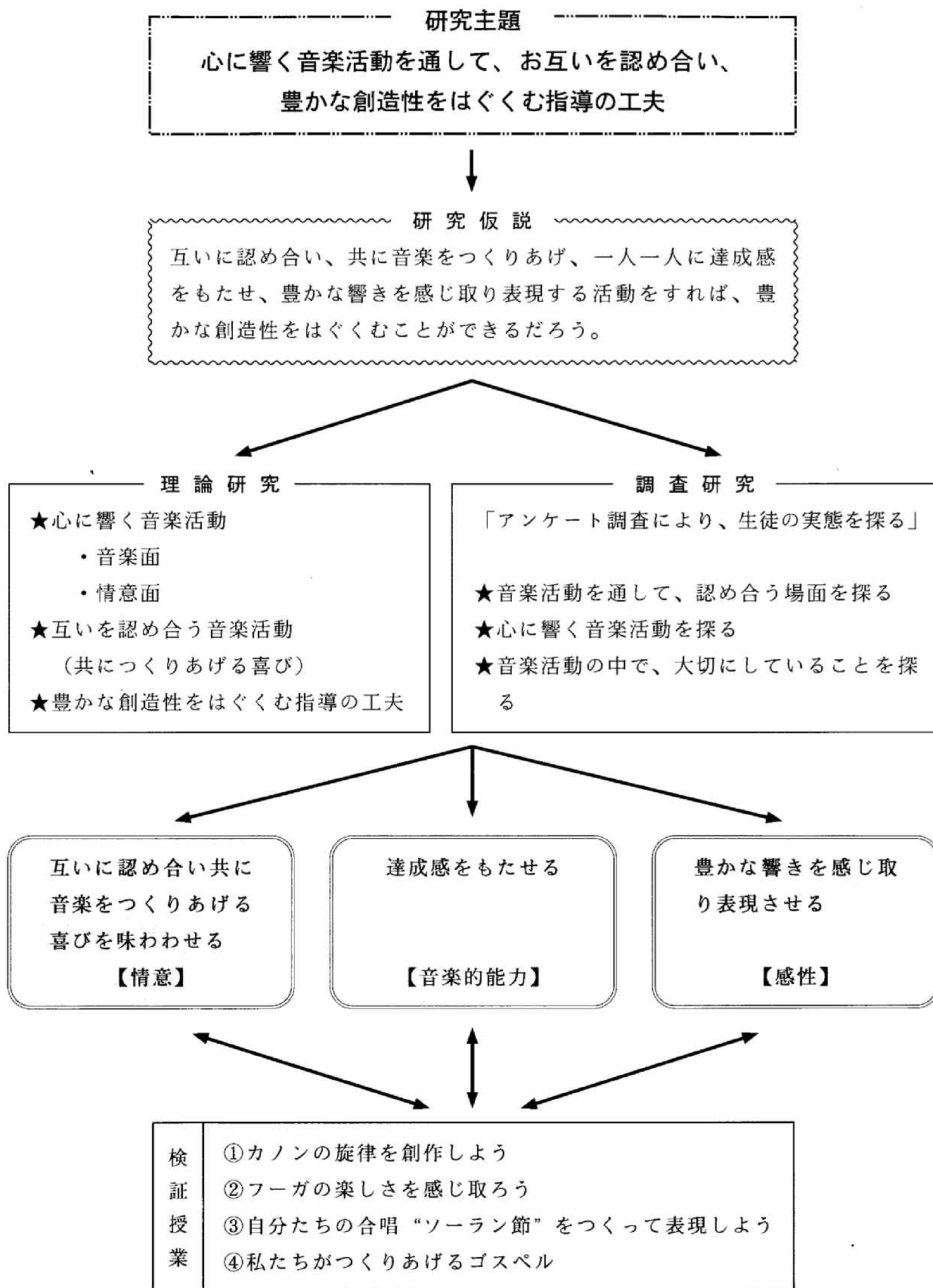
そして、研究の仮説を次のように設定した。

仮説

互いに認め合い、共に音楽をつくりあげ、一人一人に達成感をもたせ、豊かな響きを感じ取り表現する活動をすれば、豊かな創造性をはぐくむことができるだろう。

この仮説を検証するため、理論研究、調査研究を行い、その研究をもとに検証授業、研究協議を重ね、指導の工夫を図った。

Ⅱ 研究の構想図



Ⅲ 研究の内容

1 理論研究

(1) 心に響く音楽活動

「心に響く音楽活動」には、音楽面と情意面の両面から、具体的にどのような場面があるかを考えてみた。

① 音楽面

ア 美しい音色やハーモニーが心に響くとき

調律したばかりのピアノを弾くと、「ポーン」と心に響く音がする。吹奏楽などで各楽器の音程がぴったりと合った時に、透き通った透明感のある響きがある。これら音程がぴったり合った時に感じる倍音の美しい響きや、ラベルの「水の戯れ」のような曲自体が本来もち合わせているみずみずしい印象派の響きなどは、直接聴く人の心に響く。

イ 新鮮さが心に響くとき

鑑賞の学習で初めて聴いたクラシックの名曲が、音楽を愛好するきっかけとなることがある。このような、新しい曲を初めて聴いた時に感じる新鮮な気持ちは、心に響く音楽活動としてとらえることができる。

ウ 達成感

今までできなかったことができるようになった時。たとえば、リコーダーの難しいフレーズができるようになった時や、今まで出なかった高い音が楽に歌えるようになった時の達成感が、音楽活動の喜びとなる。

② 情意面

ア 一体感

演奏者と聴衆が一体となった時に一体感を感じる。たとえば合唱コンクールやコンサートなどで、全員の心が一つになると、感動を共有することができる。

イ つくりあげる喜び

合唱コンクールなどでの発表までの過程において、生徒一人一人が心を一つにして音楽をつくりあげようとする気持ちや、それまでのクラスの間関係やまとまりが、音楽を生き生きとさせ、人の心に響く音楽活動となり実を結ぶのではないか。また、表現の技能が未熟な生徒の音楽であっても、人を感動させることがある。これには情意的要素が大きくかかわっていると考えられる。人がこの上なく感動した時、体の芯からゾクゾクと震え出し、何とも言えぬ感激を味わうものだと思う。多感な中学生にこれら心に直接に訴えかける豊かな響きを体験させることが、とても大切であると考えられる。

(2) 互いを認め合う音楽活動

音楽科の授業を通して、音楽的な能力を伸ばしたり、音楽に対する感性を豊かにするとともに、情意面の成長を促すことも重要である。授業の中で互いを認め合う音楽活動を実

践することで、より良い人間関係を築き上げ、一人一人が伸び伸びと表現できるようになると考える。

「互いを認め合う」ことは、まず「互いの音を聴き合う」ことから始まる。一つの音を美しく響かせることができたなら、今度は分かれて二つの音を出してみる。互いの音を聴き合い、美しいハーモニーをつくっていくことができるようになる。複数の音が複雑にかかわり合い、最後に一つの音楽が生まれた時、集団の中の自分の存在を認識すると同時に、互いの存在を意識し合い、共につくりあげる喜びや感動を味わうことができるのではないだろうか。

また、合唱や合奏のパート練習において、生徒間で「互いに教え合う」場面が見られる。クラス全員での練習においても、学年が上がるにつれて、それまでの音楽的経験を生かして、より豊かな表現を工夫することができるようになる。互いに教え合うことは、取りも直さず互いに学び合い高め合うことにもつながる。これら互いに教え合うことによって、一人一人の音楽的能力の向上と同時に、音楽に対する感性を高め、互いを認め合うより良い人間関係をつくることのできるのではないだろうか。

互いを認め合う音楽活動を通して、共に喜びや感動を味わい、より良い人間関係を築くことで、思いやりの心や自信がはぐくまれ、一人一人が伸び伸びと自己表現をすることができるようになると思う。

(3) 豊かな創造性をはぐくむ指導の工夫

① 豊かな創造性とは

音楽教育における「創造」とは、創作活動だけではなく、同じ楽曲でも演奏者が異なれば、十人十色の解釈があり演奏があるように、表現活動の上でも創造性は発揮される。楽曲を分析して、自分なりのイメージをもち、再構築することも創造といえるであろう。「豊かな創造性」とは、楽曲に対するイメージを表現することであるが、豊かな心がはぐくまれてこそ、多彩に表現できる。

② 創造性をはぐくむためには

創造性をはぐくむためには、まず楽曲を構成する要素である音色、リズム、旋律、和音を含む音と音とのかかわり合い、形式などの働きを楽譜から読み取ることや、速度や強弱の働きによる曲想の変化を感じ取って表現を工夫することが必要である。歌曲であれば、歌詞の内容や曲想を感じ取ること、声部の役割を感じ取り、全体の響きに気を付けて歌うこと、曲種に応じた発声により言葉の表現に気を付けて歌うことが大切である。器楽であれば、楽器の基礎的な奏法を身に付け、美しい音色を工夫して表現することが求められる。

③ 豊かな創造性がもたらすもの

楽曲の理解の上にイメージをふくらませ、感覚的な理解を結びつけることで、創造性がはぐくまれていく。また、表現の工夫は、能力や考え方を振り返り見つめなおす機会ともなる。自己認識は、ひいては他者への関心や理解へとつながっていく。生徒一人一人が豊かな創造性を身に付けることは、豊かな人間性の育成や個性の伸長にもつながる。

2 調査研究

〈対象人数〉 9校 808名（第1学年324名、第2学年254名、第3学年230名）

〈実施時期〉 平成12年7月

「心に響く音楽活動を通して、お互いを認め合い、豊かな創造性をはぐくむ指導の工夫」という主題で研究を進めるにあたり、「認め合う場面」「心に響く音楽活動」「音楽活動の中で大切にしていること」について、生徒の実態を把握するため、アンケートを実施した。

「認め合う場面」・・・生徒自身が人に認められていると感じているかどうか、友達を認めているかどうか、また、それはどのような場面なのか。

「心に響く音楽活動」

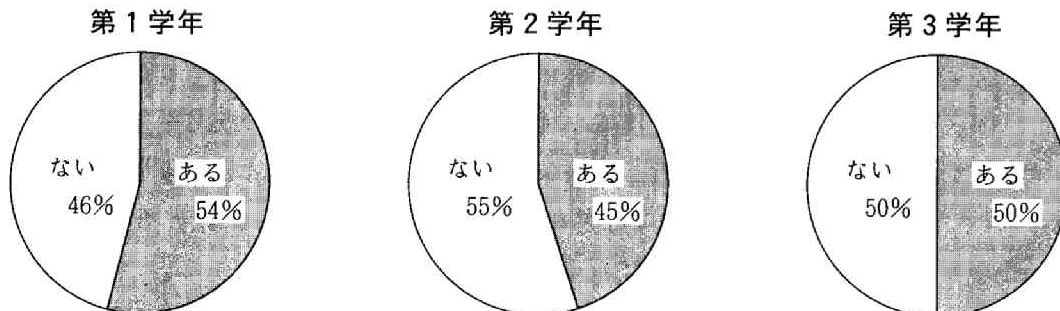
・・・音楽の授業の中で、生徒がどのような場面で感動しているのか。

「音楽活動の中で大切にしていること」

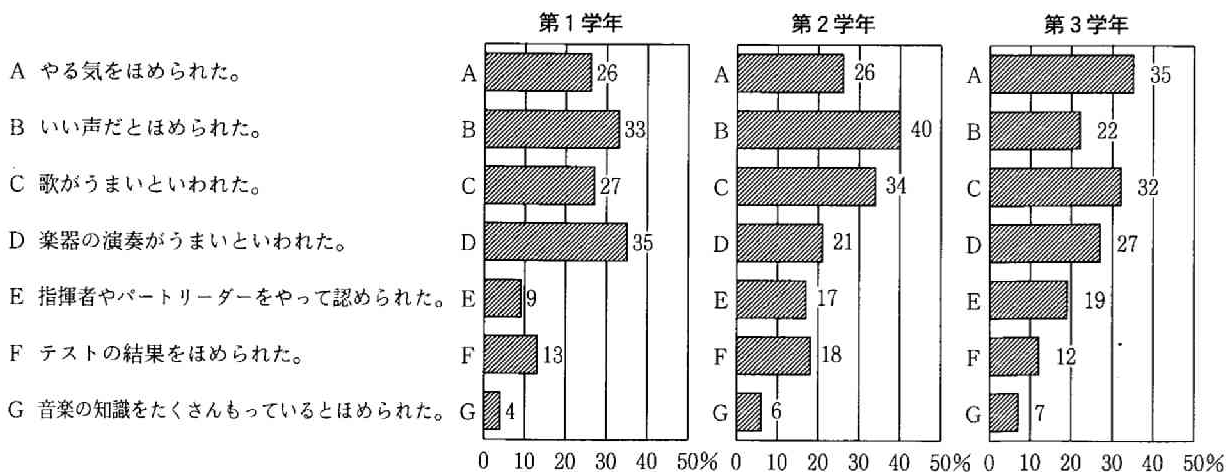
・・・生徒が音楽を表現する上で大切だと思っていることは何か。

「認め合う場面」について

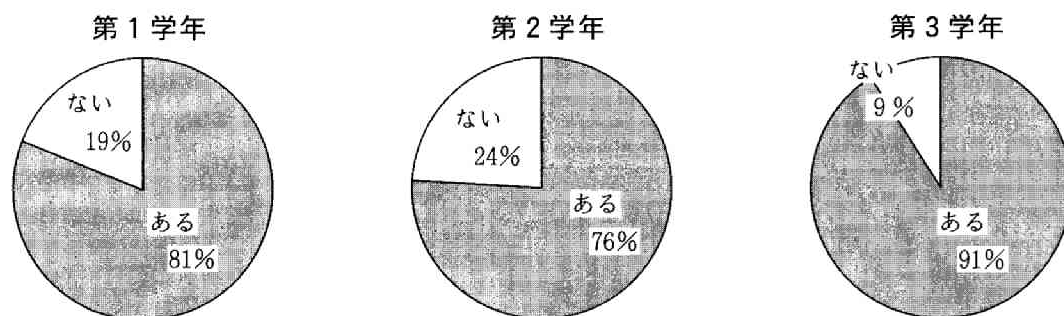
Q1 音楽の授業や音楽活動において、人に認められてうれしかったことはありますか。



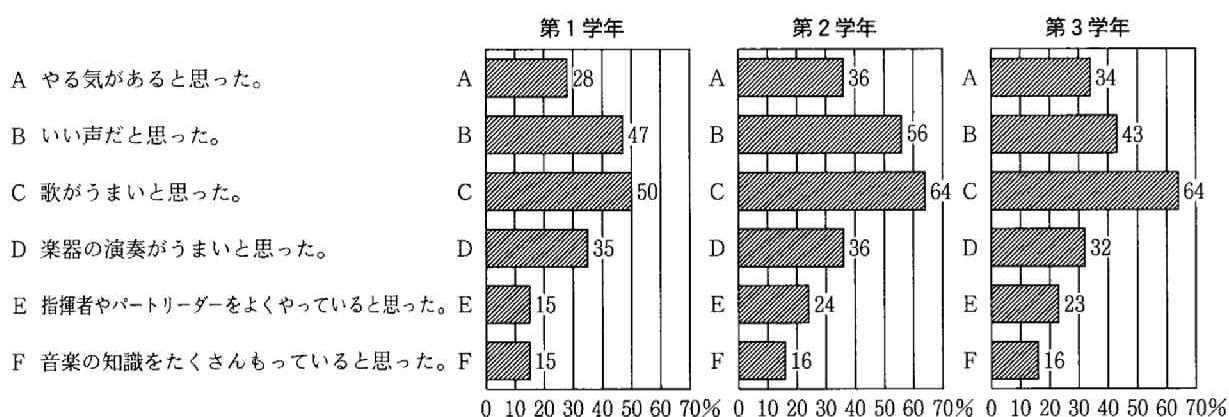
・あると答えた人に質問します。それはどのような場面ですか。（複数回答）



Q 2 音楽の授業や音楽活動において、友達の良さを感じたことはありますか。



・あると答えた人に質問します。それはどのような場面ですか。 (複数回答)



〈 考 察 〉

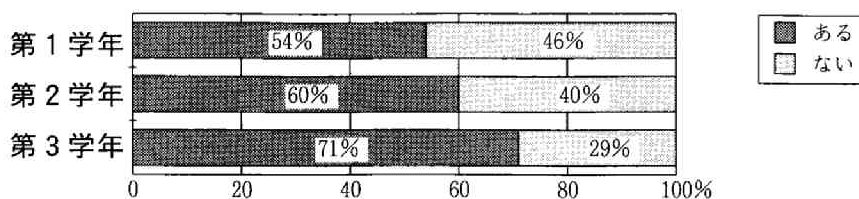
Q 1の結果から、人に認められていると感じている生徒が思った以上に少ないという印象を受けた。教師が生徒を認める発言を多くすることが大切だと考える。

また、Q 1の自分が認められていると感じている生徒に比べ、Q 2の友達を認めている生徒の方が多くいるという結果から、生徒同士が相互評価する場面をつくっていく必要があると考える。その際、生徒同士が良い人間関係を持ち、認め合える雰囲気为学校全体でつくることが必要だと考える。

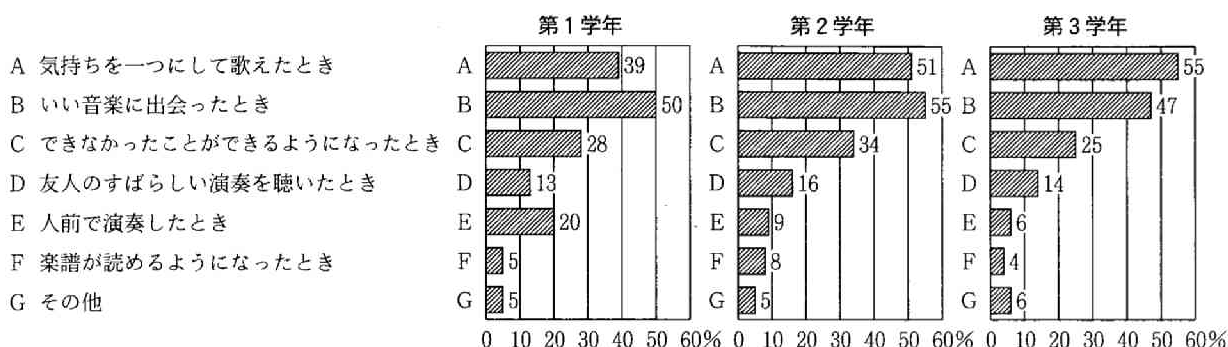


「心に響く音楽活動」について

Q1 音楽の授業を通して、感動したことはありますか。



・あると答えた人に質問します。どのようなことに感動しましたか。

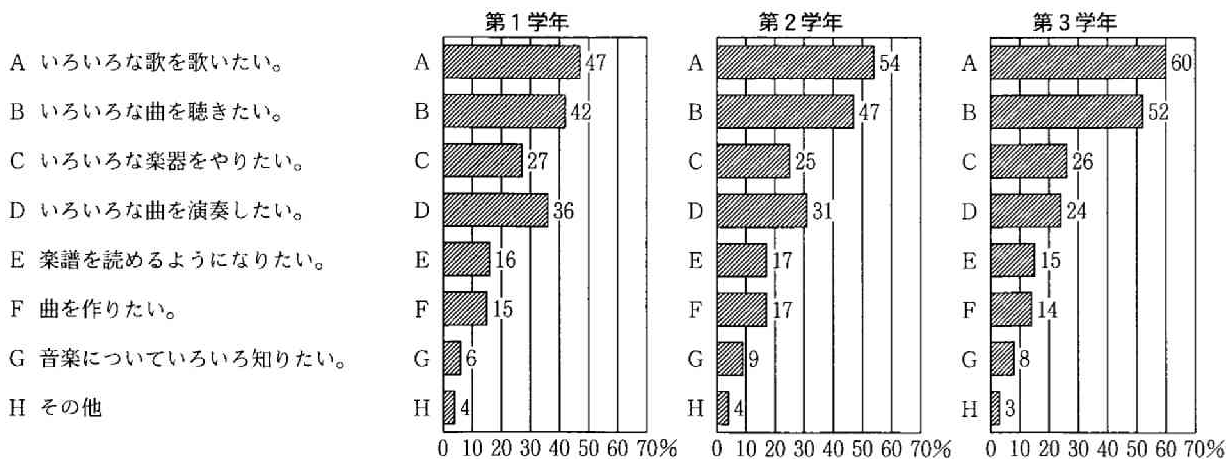


〈 考 察 〉

「感動したことがある」の割合が、学年が上がるにしたがって増えている。授業や行事を経験していく中で、音楽の良さを感じ、理解できるようになってきているからではないかと考える。そこで、第1学年の段階から、心に響く音楽活動を通して感動体験をさせることが大切だと考える。

感動体験の内容としては、「気持ちを一つにして歌えた」「いい音楽に出会った」「できなかったことができた」など、達成感や満足感についての感動という回答が多かった。共に表現する喜びを感じ取れるような授業での雰囲気づくりを心がけ、基礎・基本を重視していきたいと考える。

Q2 音楽の授業で学習したいと思っていることは何ですか。(複数回答)

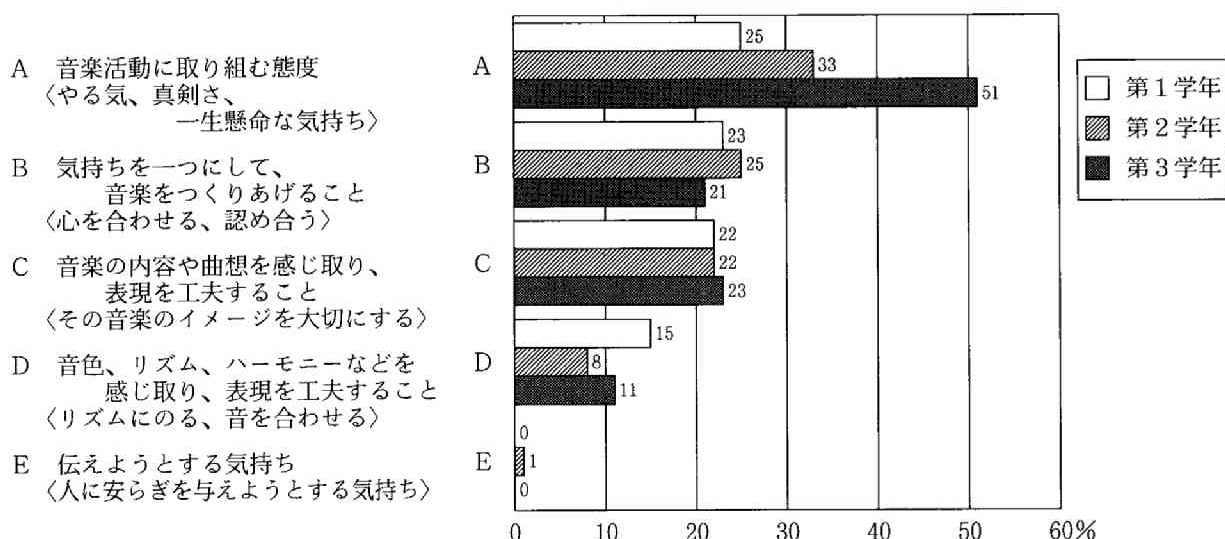


〈 考 察 〉

全学年を通じて、「いろいろな歌を歌いたい」「いろいろな曲を聴きたい」という回答が多かった。多様な音楽に興味・関心をもつことや主体的に音楽活動をしようとする姿勢を、授業の中で大切にしていきたいと考える。また、音楽についての知識や読譜、創作については意欲をもっている生徒が少ないが、生徒が主体的に音楽に取り組むためには、大変重要なものであるといえる。表現や鑑賞の活動を通して、音楽についての知識の理解を図ることや、読譜指導、創作活動の必要性を感じる。

「音楽活動の中で大切にしていること」について

Q 1 音楽の授業の中で歌ったり、楽器を演奏したりするときに、大切だと思うことはどんなことですか。



〈 考 察 〉

この設問では、自由記述の形式をとったため、回答の内容を5つの項目に分類した。「音楽活動に取り組む態度」の項目は、他の項目に比べ、いずれの学年でも大切だと考える生徒が多く、特に第3学年では、授業や行事などでの音楽活動から得た経験から、達成感を得る経験を多くしているのではないかと考える。しかし、音楽的な能力に対する回答が少ないことから、さらに音楽的な能力を向上させる指導を行っていきたいと考える。

3 授業研究

【指導事例Ⅰ】 題材名「カノンの旋律を創作しよう」

(第1学年)

1 題材設定の理由

創作活動を行うことは、個性を伸ばし創造性を豊かにするとともに、音楽に積極的にかかわる意欲や態度を育てることができる。「創作は難しい」と思われがちだが、「パッヘルベルのカノン」の一定のコード進行（C-G-Am-Em-F-C-F-G）にのせたメロディの部分的な創作は、旋律創作に慣れていない生徒でも比較的容易に取り組むことができると考える。また、旋律作りを通して、アルトリコーダーの美しい音色とハーモニーを工夫する表現活動の楽しさも味わうことができると考えた。

生徒が、グループで協力しながら学習し、音楽の楽しさを感じ取り、主体的にアンサンブルや合奏を行うことをねらいとして、本題材を設定した。

2 研究主題との関連

(1) 互いに認め合い、共に音楽をつくりあげる喜びを味わわせる。(情意)

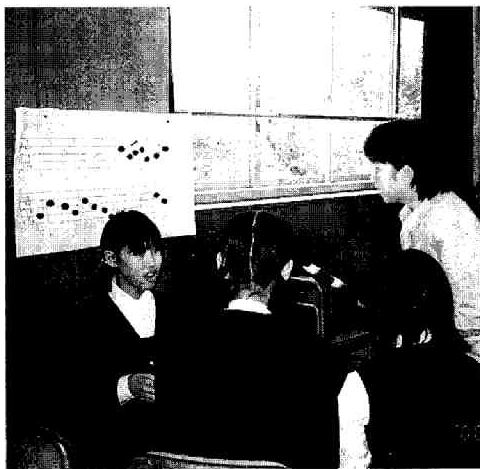
合奏の中で部分的に即興的な表現を取り入れることにより、創造や表現のおもしろさを味わわせる。また、グループ活動を通して、旋律を聴き合いながら、互いに認め合う雰囲気づくりができるようにする。

(2) 豊かな響きを感じ取り、表現させる。(感性)

旋律を重ね合わせたときに生まれるハーモニー、和音の響き合いを感じ取り、表現の工夫をする。

(3) 達成感をもたせる。(能力)

一定のコード進行の中で、和音の中の音を選んで、まとまりのある短い旋律を作ることができるようにする。



「パッヘルベルのカノン」より

① C G Am Em V F C F G V
② C G Am Em V F C F G V
③ C G Am Em V F C F G V
④
⑤ C G Am Em V F C F G V
⑥ C G Am Em V F C F G V C

3 指導目標

- (1) カノンのイメージをもとに一定のコード進行にのせた旋律を創作し、表現の工夫をさせる。
- (2) 自分のパートに責任をもち、グループで協力して演奏できるようにする。
- (3) 互いを認め高め合える雰囲気をつくり、ともに表現する喜びを味わわせる。

4 指導計画（6時間）

第1次（2時間）

- ① 「パッヘルベルのカノン」を鑑賞し、楽曲の特徴を感じ取らせる。
- ② 運指に気を付けながら「カノン」のリコーダー練習をさせる。

第2次（2時間）

- ① ハ長調の音階の上にてできる和音とコードネームを理解させる。
- ② リズムパターンを参考にして、リコーダーでコード進行にのせて旋律を作らせる。
- ③ 各グループで、互いの旋律を聴き合い、演奏させる。

第3次（2時間）

- ① 各グループで個人の作品を8小節（2声）の旋律に組み合わせる。
- ② パートを決めて練習し、表現の工夫をさせる。
- ③ グループ発表を通して互いの良さを認め、表現のおもしろさに気付かせる。

5 評価計画

第1次

- ① 「パッヘルベルのカノン」のイメージをつかむことができる。
- ② アルトリコーダーで、各旋律を正しい奏法、また一定のテンポで演奏することができる。

第2次

- ① カノンを支える和音を理解することができる。
- ② 決められたコード進行にあった旋律作りができる。
- ③ グループで協力し、演奏することができる。

第3次

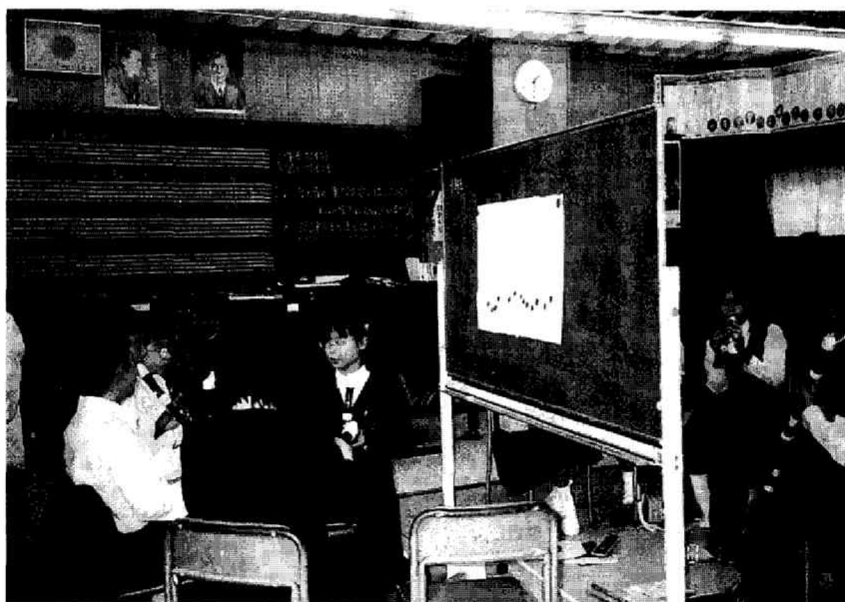
- ① 個人で作った旋律を組み合わせ、8小節の旋律作りができる。
- ② 和音の響き合いを感じ、表現の工夫をすることができる。
- ③ グループの発表を通して、互いを認め合いながら、音楽表現のおもしろさを感じ取ることができる。

6 学習指導の展開（第3次第2時の展開）

指導内容	学習活動	評価の展開	指導上の留意点
○発声練習	○校歌と既習曲の合唱をする。	◆元気よく歌えていたか。	○表情のかたい生徒には表情をやわらげる言葉がけをする。

○本時のねら いの確認	○各自、学習目標を確 認する。	◆旋律の創作方法につい て理解していたか。	○コード進行を確認さ せる。
○旋律の創作	○グループに分かれて 創作した旋律を8小 節(2声)の作品に 仕上げる。	◆一人一人が意欲をもっ て創作活動を行ってい たか。	○決められたコード進 行により創作ができ ているか。
	○パートを決めて練習 し、合わせる。	◆互いの良さを認め合い ながら活動していたか。	○創作の活動中録音テー プで和音パターンを 聴かせる。
		◆音を正しく重ね合わせ ることができたか。	
		◆リーダーの合図で録音 テープの伴奏に合わせて 演奏することができ たか。	

- グループで協力して、意欲的に学習活動を行っているか観察する。
- 旋律のまとまりや、重なり合いを工夫して創作できているかを観察する。



○グループの 発表	○各グループの発表を 聴く。	◆他のグループの発表を 聴き合い、良い点や工 夫した点に気付くこと ができたか。	○自信をもって発表で きるよう助言する。
	○気付いた点や感想な どを話し合う。		

- ハーモニーの美しさ、旋律のまとまりはどうか、発表の内容を評価する。
- 他のグループの良い点などを認め合う雰囲気の中で活動できているか観察する。

生徒作品

○まとめ

○各グループで作った旋律を入れて合わせ合奏する。
 (「遠い日の歌」の合唱と組み合わせてみる。)

◆自分が創作した旋律をみんなと一緒に演奏することにより、満足感や達成感を味わっていたか。

○達成した喜びを味わえるような雰囲気をつくる。

7 指導の評価と考察

本題材では、創作活動を身近なものとするため、「パッヘルベルのカノン」の一定のコード進行にのせたメロディの創作を行った。コードの中の音を選んで旋律を創作する活動については、二分音符、四分音符、八分音符のリズムパターンを示すなどの工夫により、1年生でも比較的容易に取り組むことができた。

グループ学習では、リーダーになった生徒が、リコーダーや音楽の苦手な生徒を助け、教え合う場面があったり、旋律を組み合わせる場面ではお互い意見を出し合いながら作っていく様子が見られ、互いに認め合いながら、音楽をつくりあげる楽しさを味わうことができた。

評価に関しては、和音の伴奏テープに合わせながら、音の重なり合いの響きを聴いて旋律の工夫をしている様子が見られ、豊かな創造性を評価することができた。

各グループの発表においては、生徒の発表後の発言や感想文の内容から、互いを認め合い、音楽表現のおもしろさを感じ取っていることが評価できた。

1 題材設定の理由

本題材は、生徒が日頃よく聴いている主旋律に伴奏が付く和声音楽とは異なり、同じ旋律が調や声部をかえ何度も繰り返されるフーガ形式で構成され、多声音楽の代表である。

鑑賞で取り上げた「小フーガト短調」の旋律を自分たちで演奏することによって、フーガの仕組みや表現の豊かさを感じ取り、多声音楽の新鮮さや楽しさを味わってほしいと考えた。

また器楽合奏の特徴は、音色や音量や奏法が異なる様々な楽器を演奏することによって、一つの音楽をつくりあげることにある。生徒が互いに認め合い教え合うことによって、一人一人の技能を高めるとともに協力して成し遂げる体験をすることができると考え、本題材を設定した。

2 研究主題との関連

(1) 互いに認め合い、共に音楽をつくりあげる喜びを味わわせる。(情意)

二人組、楽器別、パート別などのグループ練習をすることにより、互いに聴き合い、教え合う雰囲気をつくる。発表では、それぞれの表現の良さを認め、高め合う場面をつくる。

(2) 豊かな響きを感じ取り、表現させる。(感性)

パイプオルガンは華やかでかつ荘厳な響きができる。その豊かな響きを感じ取った上で、一人一人が楽器の音色や奏法を考え、壮大な響きにふさわしい表現を工夫させる。

(3) 達成感をもたせる。(能力)

リズムを簡略化するなど、グループの技能に応じた編曲を工夫し、生徒一人一人が自信をもってフーガの主題を演奏できるようにする。合奏を通して、声部の役割を理解させ、フーガの仕組みや表現の豊かさを感じ取る場面をつくる。

3 指導目標

(1) フーガの主題を様々な楽器で演奏させ、響きの違いを感じ取らせる。

(2) 互いに聴き合い、教え合いながら、音楽をつくっていく楽しさを味わわせる。

(3) フーガの特徴を理解させ、楽曲にふさわしい表現を工夫させる。

4 指導計画(6時間)

第1次(1時間)

① 「小フーガト短調」を鑑賞し、パイプオルガンの音色や響きを感じ取らせる。

② フーガの仕組みを理解し、多声音楽の響きを味わわせる。

第2次(4時間)

① アルトリコーダーでフーガの主題を演奏させる。

② パート別に分かれて演奏させ、それぞれの声部の役割に気付かせる。

③ 楽器別に二人組で教え合い、様々な組み合わせで合奏させ、表現を工夫させる。

第3次(1時間)

① パート別、楽器別で合奏させ、それぞれの良さを感じ取らせる。

② グループ別に発表し、相互評価させる。

5 評価計画

第1次

- ① パイプオルガンの響きの美しさを感じ取ることができる。
- ② 主題が様々な声部にあらわれる様子を聴き取ることができる。

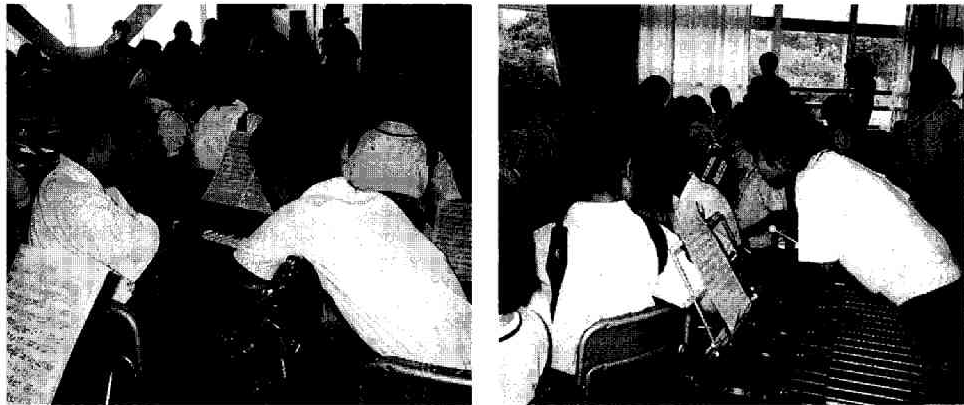
第2次

- ① 主題を正しい奏法でまた一定のテンポで演奏できる。
- ② 主体的にパート練習に取り組むことができる。
- ③ 声部の役割を理解し、表現の工夫をすることができる。

第3次

- ① パートの役割を理解し、曲想や音色などの表現の工夫をすることができる。
- ② 各グループの発表について、互いを認め高め合うことができる。

6 学習指導の展開（第3次第1時の展開）

指導内容	学習活動	評価の展開	指導上の留意点
○教材の鑑賞 ○グループ練習	○パイプオルガンの原曲を鑑賞する。 ○二人組で練習する。 ○テンポや音色を確認しながらパートで練習する。	◆オルガンの豊かな響きを感じ取れたか。 ◆意欲的に取り組んでいたか。 ◆曲にあったテンポや音色で演奏していたか。	○音色や主題の受け渡しに注目させる。 ○並び方を工夫させる。 ○テンポを指示する。 ○曲にふさわしい音色を考えさせる。
			
○代表の演奏	○指名した数人で演奏する。	◆主題の受け渡しがうまくできたか。	○主題の最初をはっきり演奏させる。
<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;"> ■楽器の音色を工夫し、パートの役割を理解しているかを観察する。 </div>			
○グループの発表	○2つのグループに分け合奏を発表する。	◆表現の工夫をしていたか。 ◆積極的に取り組んでいたか。	○表現の工夫の要点を板書しておく。 ○聴くグループが隣の演奏グループに教え

	○板書した要点を確認しながら感想を言い合う。	◆グループの良さを発見し、互いを認め合えたか。	てあげられる雰囲気をつくる。 ○感想を言いやすいように助言する。
			
	<p>■表現の工夫ができ、共に楽しく演奏しているかを観察する。</p> <p>■互いの良さを認め、高め合える雰囲気の中で活動しているかを観察する。</p>		
○まとめ	○全員で合奏をして、録音する。 ○録音を聴きながら、「合奏の記録」を書き、感想を言う。	◆表現の工夫ができ、共に作りあげた喜びを味わうことができたか。	○共に作りあげた合奏であることを意識させる。 ○一人一人の成果をほめる。

7 指導と評価の考察


本題材においては、第1次で原曲を鑑賞してフーガに興味をもたせるようにし、第2次で全員がフーガの主題を演奏できるようにした。その際、グループの技能に応じた編曲や奏法の工夫は効果的であった。また、第3次でグループ別発表や全員合奏を通して、多声音楽の良さや一つの音楽をつくりあげる楽しさを味わわせることを大切にした。


合奏においては、生徒一人一人が希望により楽器を選択したため、主体的、意欲的に取り組むことができた。

二人組や少人数による学習形態を多く取り入れることにより、読譜力や一人一人の演奏技能を高めることができた。また、教え合いや助け合いなど、それぞれの良さを認め合う活動につながった。

評価に関しては、生徒一人一人が主体的に活動していくために、それぞれ自分の課題や目標をはっきりと認識させ、一つ一つ達成していく過程を観察し、評価することが大切である。フーガの楽しさを感じ取ったかについては、意見発表や合奏の記録カードなどにより評価した。

6 学習指導の展開（第3次第2時の展開）

指導内容	学習活動	評価の展開	指導上の留意点
<p>○発声練習</p> <p>○合唱</p>	<p>○ウォーミングアップをする。</p> <p>○既習曲の合唱をする。</p> <p>○「ソーラン節」を合唱する。</p>	<p>◆意欲的に行えたか。</p> <p>◆前時までの学習を生かして歌えたか。</p> <p>◆混声四部合唱の響きを味わえたか。</p>	<p>◇雰囲気づくりを心がける。</p> <p>◇音の不安定な所はピアノで音を取る。</p>
<p>■意欲的にのびのびと豊かな発声ができているか観察する。</p>			
<p>○グループ学習</p>	<p>○2つのグループに分かれ、互いに話し合いながら独自の表現を工夫し、練習する。</p> <p>* A・Bそれぞれのグループが、旋律創作とリズム創作に分かれる。</p> <p>○模造紙（拡大楽譜）に記す。</p>	<p>◆一人一人が積極的に意見を述べ、創造することができたか。</p> <p>◆互いの良さを認め合いながら、つくる喜びを感じ取ることができたか。</p>	<p>◇創作の時間、打ち合わせの時間、練習の時間を、うまく配分できるように指示する。</p> <p>◇お互いに認め合えるよう助言する。</p> <p>◇各グループが活動しやすいような学習形態を考えておく。</p>
			

<p>■互いに認め合える雰囲気の中で活動をしているか、その様子を観察する。</p> <p>■曲にふさわしい創作、表現ができていないかを観察する。</p>			
○グループ発表	○グループごとに発表し、鑑賞し合う。 ○鑑賞の記録を記入する。 ○工夫されていた点について互いに意見交換する。	◆自信をもって意欲的に表現できていたか。 ◆良い点を認め合うことができていたか。	◇評価のポイントを示す。 ◇旋律創作、リズム創作、合唱の三つの観点から評価させる。
			
○まとめ	○全体で合唱する。	◆グループ活動が活かされ、生き生きと表現できていたか。	◇本時の成果を認めるとともに、課題を明らかにする。

7 指導と評価の考察

本題材で扱った合唱曲は、郷土の民謡である「ソーラン節」を編曲したものである。合唱曲として混声四部合唱の響きを味わいながら、日本の音楽の特徴的な部分を感じ取ることができるという魅力をもっている。ともすると合唱の授業は、教師主導になりがちであるが、創造的な表現活動を加えることで、より生徒が主体的に音楽にかかわることができ、心に響く音楽活動へとつながったのではないかと思う。また、民謡のメリスマ的な部分を創作させたり、和太鼓を取り入れたりしたことで、郷土の音楽への理解を深めることができた。

グループ活動では、リーダー的な役割をしている生徒がうまく全体をまとめ、互いに意見を出しやすい雰囲気の中で、助け合いながら活動することができた。普段、合唱活動の中で、歌に対して自信の持てないような生徒が、生き生きと和太鼓で活躍したり、また、堂々とソロを歌って声を披露する生徒がいたり、音楽を自由に心から楽しんでいる様子がみられた。

評価については、グループ活動や発表の様子を観察し、意欲的な取り組みについての評価を大切にしたい。また、生徒が互いの発表を聴いて、評価カードに記入することにより、それぞれの良いところを認めながら学び合い、表現のおもしろさを感じ取ることができたかを評価したい。

1 題材設定の理由

ゴスペルは最近流行の音楽ジャンルであり、幅広い年齢層に受け入れられている。その理由は合唱でありながらある程度自由に自分を表現でき、それが心の開放や充実感につながると考えられる。そこで、第2学年選択音楽の授業においては、生徒をゴスペルに触れさせることによって、必修教科で行ってきた合唱表現をもとに、さらに自分の思いや表現の喜びを感じさせたいと考えた。

本題材では、生徒が自ら進んで音楽の学習に取り組むために、課題や課題解決のための方法を生徒自身に選択させたり、創造的な表現活動で生徒の自由な発想をできるだけ尊重したりするなど、生徒自身に任せる範囲を拡大していくようにした。

また、グループ相互の演奏発表を通して、生徒同士が演奏を聴き合い、意見を発表することにより、音楽的表現能力や鑑賞力を高め合うように発展させたい。

2 研究主題との関連

- (1) 互いに認め合い、共に音楽をつくりあげる喜びを味わわせる。(情意)

グループ活動で、互いの意見や演奏を聴き合うことにより、共に表現する仲間を認め合うことができる。また、それぞれが目標をもち、役割を果たすことにより、共に音楽をつくりあげる喜びを感じ取ることができる。

- (2) 豊かな響きを感じ取り、表現させる。(感性)

自分に合った曲想の選択や曲にふさわしい音色、リズム、ハーモニーを感じ取って表現しようとする態度を育てる。またステップを踏むなどの振り付けを工夫したり、手拍子やリズム楽器を加えたりすることにより、音楽表現の自由なおもしろさを体験させる。

- (3) 達成感をもたせる。(能力)

独唱・重唱・合唱などの演奏形態について、自主的に決定させたり、リズムや伴奏をグループで工夫させたりすることにより、生徒自身の音楽に対する思いを生かしながら、より良い表現を目指し、表現の能力の向上を図る。

3 指導目標

- (1) グループ活動を通して、互いを認め合い高め合える雰囲気をつくらせ、合唱をつくりあげる喜びを味わわせる。
- (2) 旋律やリズムを自由に変化させて、新しいものをつくりあげるおもしろさを体験させる。
- (3) 楽曲の特質を感じ取らせ、それを生かした合唱表現を工夫させる。

4 指導計画

第1次(3時間)

- ① 「ヘイル・ホーリー・クイーン」の英語の歌詞を読み、イメージをふくらませる。
- ② 音程やリズムに気を付けて、混声三部合唱をさせる。

第2次(3時間)

- ① グループに分かれて、役割分担をさせる。
- ② 指揮や伴奏・即興的なソロ部分の創作リズムの工夫、振り付けなどをそれぞれが考え、

表現させる。

第3次（1時間）

- ① 創造的な部分についてグループ学習し、イメージをつくりあげる。
- ② グループごとに発表し、それぞれの楽曲の楽しさを味わい、互いを認め合いながら表現の工夫をさせる。

5 評価計画

第1次

- ① 英語の発音に気をつけ、内容を理解して合唱することができる。
- ② 正確なリズムや音程で表現し、楽しく意欲的に合唱活動に取り組むことができる。

第2次

- ① 楽曲に対する自分の思いを生かすことができる。
- ② 各グループで楽曲にふさわしい表現を工夫することができる。

第3次

- ① 意欲的にグループ学習に取り組み、イメージを膨らませて、自分たちのゴスペルをつくりあげることができる。
- ② 各グループの演奏を通して、互いを認め合いそれぞれの楽曲の楽しさを味わいながら、表現を工夫することができる。

6 学習指導の展開（第3次第1時の展開）

指導内容	学習活動	評価の展開	指導上の留意点
○発声練習	○ウォーミングアップをする。	◆意欲的に行えたか。	◇楽しくできるような雰囲気にする。
○合唱	○既習曲の合唱をする。	◆前時までの学習を生かして楽しく意欲的に歌えたか。	
<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>■楽曲に対するイメージをもって、のびのびと歌えているかを観察する。</p> </div>			
○グループ学習	○グループにわかれ、意見を出し合いながら表現を工夫する。 ・指揮の工夫 ・旋律の創作 ・リズム創作 ・振り付けの創作 ○拡大した楽譜に記入する。	◆一人一人が自分の思いを積極的に発表し、創作活動に参加することができたか。	◇認め励ますようにする。 ◇工夫した点を認めるような助言をする。 ◇発表の仕方を確認する。

<p>○グループ発表</p>	<p>○グループごとに発表し鑑賞し合う。</p> <p>○学習カードに、他グループの工夫している点やよかった点を記入する。</p> <p>○工夫していた点について、意見交換をする。</p>	<p>◆互いを認め合える雰囲気であったか。</p>	<p>◇互いを認め合えるよう助言する。</p>
<p>○まとめ</p>	<p>○全体で合唱する。</p>	<p>◆自分たちのゴスペルを生き生きと表現できていたか。</p>	

7 指導と評価の考察

本題材では、わかりやすく親しみやすいゴスペルという題材で、グループ活動を通して生徒自身が自分に合った演奏表現を工夫することを目指した。生徒は、一人一人の意見を尊重しながら学習活動を展開していくことによって、共に表現する仲間を認め合うことができると考える。

身体表現や即興的な表現を創造させることにより、主体的な学習活動を進めようとしている。また、それぞれが目標や役割を果たし自分を表現することにより、生き生きと学習活動に取り組むことができると考える。

評価では、グループ活動で互いを認め合い、より良い表現を目指して行う、生徒の自己評価や相互評価と、教師が行う、グループ活動での取り組みの様子や表現の工夫の観察による評価が主となる。

必修教科では、集団による基礎的・基本的な内容の指導を基盤としているが、選択教科では、生徒の個性を生かした多様な学習活動の展開が必要と考える。

また、生涯にわたって生徒一人一人が音楽に楽しくかかわることができるよう、教材の選択や指導方法の工夫改善を行っていきたい。

IV 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本年度の研究は、まず研究員それぞれが抱える悩みを出し合うことから始めた。その中でも① いかにかに生徒の心を動かすような授業展開を実践すべきか、② いかにかに生徒一人一人が伸び伸びと表現できる集団の雰囲気づくりをすべきか、という二つの悩みに注目した。

そこで、音楽科の授業において、一人一人の音楽的能力を高めること、互いを認め合い、共に音楽をつくりあげることが大切であると考え、研究主題を「心に響く音楽活動を通して互いを認め合い、豊かな創造性をはぐくむ指導の工夫」と設定し、研究を進めてきた。

研究の視点は、以下の3点である。

- 互いに認め合い共に音楽をつくりあげる喜びを味わわせる指導の工夫（情意）
- 豊かな響きを感じ取り表現させる指導の工夫（感性）
- 一人一人に達成感をもたせる指導の工夫（能力）

次に、これらの視点から研究仮説を立て、理論研究と調査研究を進めた。理論研究においては、「心に響く音楽活動」「互いを認め合う場面」「豊かな創造性」を探っていくことで、感動を体験することができる授業計画や指導方法が明らかになってきた。調査研究においては、生徒が音楽の授業に対して求めていることを探ることで、生徒が音楽を愛好し、豊かな表現力を身に付けていくことのできる授業展開をイメージすることができた。そして、仮説検証のための授業研究を実施した。授業研究から得られた研究の成果は次のとおりである。

① 「パッヘルベルのカノン」のリコーダーアンサンブルと創作

一定のコード進行に着目し、旋律を創作しハーモニーを工夫することで、音楽の楽しさを感じ取り、主体的に音楽にかかわろうとする態度がはぐくまれた。

② 「小フーガ短調」の器楽合奏

技能の差に応じたパート譜には工夫が見られた。また、フーガの仕組みを理解し、多声音楽がもつ表現の豊かさを感じ取り、教え合いながら一つの音楽をつくりあげる喜びを味わうことのできる授業であった。

③ 「ソーラン節」の合唱と創作

アカベラの合唱に和太鼓を取り入れたリズム創作を加えた。和太鼓を体験することで郷土の音楽を理解し、創造的音楽活動を通して互いを認め合うと共に、表現力を身に付けることができた。

2 今後の課題

本研究を通して、豊かな創造性をはぐくむための様々な指導内容や指導方法が明らかになった。しかし、課題として次のようなことがあげられ、今後も研究していく必要がある。

- ① 生徒が自ら表現を工夫することのできる音楽活動を実践していくこと。
- ② 互いの表現を認め合う場面を設定した授業展開を工夫すること。
- ③ 一人一人の能力の差に応じた教材を開発していくこと。